

## ○美術と文部省

黒田清輝氏の談

文部省提出の豫算説明を見ると、「美術奨励に關する中央審査機關設置の必要あり其經費一萬圓を文部省所管經常部第一款に豫算せり」とある、これに依つて考ふるに結局巴里のサロン、倫「敦」のローヤルアカデミーに倣つて美術上の奨励法を取るものであらう、即ち資格あり信用ある審査官の選定に依つて美術品の優劣を付け以て充分の奨励を計るのであらう、文部省の此計畫は時勢の要求に應じた最も急務中の急務で、余は大いに此計畫を賛成するものである、元來政府が美術上に心を傾けた例たゞしがないのに、金額と規模の如何は扨置いて本議會に一萬圓を要求したるは明治政府に於ける破天荒の一事で牧野文部大臣たる其人の名は慥かに美術界に永遠の紀念として残るであらう、官設では獨り東京美術學校あるのみだが、余は寧ろ學校よりも今回の計畫を取るもので、學校の如きは畢竟私立でも間に合ふが、美術全体の奨励は先づ政府の手を借らねばならぬ、專制國の日本の習慣として今日の所政府を中心とせねば其發達も覺束ないのであるから、美術奨励の如きも政府の手に待たざるを得ぬ、美術は云ふ迄もなく人類に對する無形の資本で文明の程度が進むに隨つて此の無形の資本を擁護し誘掖せねばならぬ而かも從來殆んど放擲して顧みられなかつた明治政府は各方面に手を付けて着々これが進歩發達を計るにも拘はず、美術上に對しては僅に東京美術學校を設立したるのみ、余は屢々之を在朝在野の有力者に説きたれど、皆賛成を表するに止まり之が實行を計るものなきは平生の遺憾として措かざりしに牧野文相にして初めて之を事

實にしたるを喜ぶのである、次いで必要を認むるは美術館で、末松男も述べられた如く、嘗に内外人に美術品を示めす必要あるのみならず、営業美術家に對し無上の參考を與ふる所以である、美術家は天然を土臺として研究するのであるが、實地は天然に遠ざかり或程度迄は天然と戰ふ必要あるも、想を練る點に於て古人の名畫珍作を觀るの必要がある、禪宗の坐禪も不世出の偉人ならざる限り坐禪と首つ引きのみで心膽を鍊るとは出來ぬ、美術家も天然に對すると同時に古の名家と相對し理想を談ずるを要す、即ち古名品を見ては想意結構を窺がふので、之を胸中に吞吐する間知らず／＼引き出されて、古人以上以外の名作を出すのである、美術家は古人の技術を見るよりも想意を見るが肝要で、技術は普通の稽古と天然の研究で足る、想意に至ては時代の研究より古人の作より得たる智識に待ざるを得ぬ……今日の洋畫の程度を譬ふると技術あるも字引がない、字引があつても讀書家がない、然るに今回文部省が計畫したので讀書家が出來た、此上一步進て美術館を設立せば字引を得る譯である

『報知新聞』明治四〇年二月六日